

2 【中学校】学校全体で取り組む・PBIS

「だれもが行きたくなる学校づくり」を推進するPBIS

松本一郎・三宅理抄子

学校に行くことは素晴らしいことであり、子どもたちは、その素晴らしいことに毎日取り組んでいるのです。その素晴らしい行動に着目し、それを可視化し、みんなで共有することで、学び合い、高め合い、一人一人が成長できる糧とすること、「これがPBISの精神だ」と考えています。

総社市の不登校対策として始まった「だれもが行きたくなる学校づくり」（以下、「だれ行き」）は、不登校の原因を探り、その原因に応じた対策を考えるという問題対処型の取り組みではありません。「毎日、学校に行って、自分自身を成長させようと努力している子どもたちは、何が魅力で登校しているのか」という学校の魅力に着目するプラスの発想が原点になっています。マルチレベルアプローチによる予防的・開発的・積極的・包括的生徒指導によって、ソーシャルボンドを形成し、だれもが行きたい魅力あふれる学校を目指す取り組みの一つが、総社西中学校のPBISなのです。

SCCのコーディネートから誕生したSWPBIS

導入当時は、生徒たちには規律に反発する傾向があり、友達・教職員と温かい人間関係が築きにくい状況がありました。そこでスクールカウンセリングチーム（教育相談教諭。以下、SCC）は、「だれ行き」研修講師陣（大学教員等の専門家）と連携を図りながら、改善の糸口を探っていきました。授業参観をはじめ、個別相談、発達障がいについての教職員研修を積みながら、スクールカウンセラーであった枝廣和憲先生からPBISのアイデアを得ました。

チーム学校として「だれ行き」を推進していくためには、学校の状況を熟知し、幅広い知識や経験を持ち、専門家との連携を担当するSCCの存在が欠かせません。そして、SCCのコーディネートによって、PBISの導入が可能となったのです。

あえて「SWPBIS」と言うのは、学校全体での取り組み（School Wide）であるということですが、私たちはSWにSoja-Westの意味も込めました。

資料3-2-1 行動チャート 総社西中学校で期待される行動 ～人・物・時間を大切に～

場 期待	教室で	廊下で	グラウンドで	図書室で	体育館で	トイレで
自分を尊重する	<ul style="list-style-type: none"> ・課題に集中します。 ・注意深く聞きます。 ・よい姿勢をします。 ・落ち着いて行動します。 	<ul style="list-style-type: none"> ・静かに歩きます。 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しみます。 ・規則を守ります。 	<ul style="list-style-type: none"> ・静かにします。 ・勉強します。 ・本を読みます。 	<ul style="list-style-type: none"> ・静かに座って待ちます。 	<ul style="list-style-type: none"> ・手をよく洗い、乾かします。
友達を大切に する	<ul style="list-style-type: none"> ・適切な言葉遣いをします。 ・適切な声の大きさで話します。 ・友達に親切にします。 ・助け合います。 ・他人の意見や権利を尊重します。 	<ul style="list-style-type: none"> ・パーソナルスペースを意識します。 ・あいさつをします。 ・会釈をします。 	<ul style="list-style-type: none"> ・安全に遊びます。 ・時間や用具を共有します。 	<ul style="list-style-type: none"> ・会話はささやき声でします。 	<ul style="list-style-type: none"> ・先生の指示をよく聞き、周りをよく見ます。 ・友達に拍手します。 	<ul style="list-style-type: none"> ・清潔に使います。 ・プライバシーを尊重します。
物・時間を大事にする	<ul style="list-style-type: none"> ・使った物を片付けます。 ・公共物を大切にします。 ・時間を意識します。 ・素早く行動します。 ・ゴミはゴミ箱へ捨てます。 	<ul style="list-style-type: none"> ・掲示物を大切にします。 	<ul style="list-style-type: none"> ・用具は大切に使います。 ・後片付けをきちんとします。 ・ぬかるんだ所は避けて歩きます。 	<ul style="list-style-type: none"> ・帰るときには椅子を元に戻します。 ・本は丁寧に扱います。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ボールやネットなど適切に扱います。 	<ul style="list-style-type: none"> ・備品を丁寧に使います。 ・汚れたら掃除をします。 ・節約をします。
心を込めて掃除します。						

「行動チャート」の作成

「行動チャート」は、PBISの旗印であると同時に、目標や方向性を示す灯台の意味があります。この作成に多くの教職員が参画し、合意を形成することが、スクールワイドで実施するポイントになると思います。

そこで、学校全体で、「人・物・時間を大切に」という総社西中学校の合言葉を中心に、各活動場面での目標を「総社西中学校で期待される行動」として設定しました。これは、「だれ行き」で行っている「品格教育」にも関連付けています。作成にあたっては、それぞれの場面で生徒にどのような行動ができるようになってほしいか、現在在籍する生徒の実態に合わせたものにしました。また、「〇〇します」というポジティブな表現で統一しました。この「行動チャート」(資料3-2-1)はポスターにして、教室、廊下、トイレ、掲示板など数十か所に掲示し、だれでもいつでも見られる状態にしました。

振り返りは各担任に任せ、毎月の「品格教育」の徳目に関連した行動ができたか、目標が達成できたかを盛り込んだ振り返りをするクラスもあります。

「Good Behavior チケット」の導入

総社西中学校のPBISの取り組みの特色は、生徒のよい行動を「可視化」し、保護者にも届けるというところです。そのためのアイテムとして、「Good

資料3-2-2
Good Behavior チケット



Behavior チケット」(以下、GB チケット)を導入しました。

悪い連絡は同じ生徒に集中しやすく、その保護者は、どんな気持ちで連絡を聞いているのかと思うと心が痛みます。そうした保護者こそ、GB チケットを待ち望んでおり、保護者との関係性を改善する鍵がそこにあると思います。

総社市の「だれ行き」のキーワードに「先手必勝の生徒指導」があります。これは何か問題が起きてから保護者と連絡をとるのではなく、普段から子どもの「よい行い」をもとにつながり合うことで、教職員と保護者とのポジティブな人間関係を積極的に築いていきたいという理念を表しています。

GB チケットは、教職員の気持ちが動いたとき、あるいは「ありがとう」と思ったときに渡されます。非常に漠然としていますが、この方法だと教職員がやりやすく、また教職員の感性が養われると考えました。

ただ、AさんとBさんが同じよいことをしても、GB チケットをもらえる場合ともらえない場合が出てきます。そのことが、生徒の不公平感を助長するのではないかという意見もありました。しかし、実践してみてわかることは、服装や頭髪などへの注意や指導の違いには不公平感を抱く生徒が多いのに比べて、GB チケットを渡すというプラスの行為には、不公平感は生まれにくいという実感があります。

GB チケットは色やイラストを変えて6種類用意されています。GB チケットはミシン目で切り離すことができ、内容が書かれた右側を保護者に見せ、左側は専用のノート(生徒1人1冊)に貼って教室に保管。10枚たまと集会で校長から賞状が渡されます。

GB チケットの渡し方は、それぞれの教職員が自分で渡す、担任から渡してもらう、クラス全員に紹介しながら渡す、こっそり渡すなど、さまざまなバリエーションがあります。また、学級通信で保護者にお知らせする、保護者懇談会で渡すなど、担任の判断で適切な方法で利用されていました。

さらに、学期内にクラスの生徒全員に渡すことを目標にして、生徒の氏名印をチケットに押した教員、どんなことで渡したか内容を細かく記録しておく教員もいました。通知表の所見や指導要録に活用できるからです。

生徒・保護者の反応

このGB チケット発行開始から2か月後には、保護者からの反響が形とな

って表れました。生徒指導上のことで保護者に連絡した折、「先生は、うちの子にGBチケットをくれた先生ですよ」ということから話が始まり協力的な雰囲気になったり、「子どものよい行動を知り、家庭でプラスの会話ができます」などと感謝の言葉を伝えてくれたりと、肯定的なメッセージによって、保護者との温かい信頼関係が生まれてきました。

生徒は「行動チャート」で場面ごとによい行動の具体例を学び、さらにGBチケットで感謝されることにより、自信を深め、よい行いを次々と具体的に行っていました。友達がGBチケットをもらっている姿を見て「これがよい行いなのか」と気づいたり、「よい行いをすると自分に返ってくる」と感じたりする生徒もいました。陸橋でお年寄りの荷物を運ぶという善行もあり、学校への感謝の言葉が、教職員のモチベーションを高めました。

ある卒業生の保護者は、「私の子どもは卒業までに2枚のチケットをもらいました。高校入学後の今も、額に入れて机の上に置いて毎日見えています。この取り組みはぜひ続けてください」と、子どもの様子を教えてくれました。

GBチケットと教職員の変容

学年会でGBチケットを導入しようとしたとき、何人かの同僚は、新しい仕事を増やすことに抵抗感を示しました。そこで、心理的負担感を軽減するために、「できる人から無理のない範囲でGBチケットを書きましょう」と伝えました。やらされる意識では逆効果と思ったからです。しかし、実際にGBチケットを渡し始めると、その教育的効果を実感した教職員は、身近なコミュニケーションツールとして積極的に活用していきました。

職員室の中で、GBチケットが話題になることも増えました。「Cさんが、〇〇してくれたんよ」などと、生徒のよい行動を話題にすることが増えました。今まで通り過ぎていた生徒の価値ある行動が、GBチケットに書き留められて、可視化されることによって、みんなに共有されていきました。

また、補欠や出張に際して、同僚同士でGBチケットをやりとりしました。管理職も生徒や先生に感謝の言葉を書きました。職員室に笑顔が増えるとともに、みんなが穏やかになっていきました。一番の効果は、チケットを書く教職員自身の自尊感情を高めることにあるのかもしれませんが。総社西中型PBISの実践をヒントにして、教職員・児童生徒・保護者の温かい笑顔あふれるポジティブな学校の輪が広がることを願っています。

〈参考文献〉

東長典（2015）『だれもが行きたくなる学校づくり入門』総社市教育委員会

松本一郎・三宅理抄子（2016）「チーム学校とSCC」『チーム学校と教育相談教論』日本学校教育相談学会